

「教育コミュニティ」づくりの展開

——岬町地域教育協議会の歩み——

高田 一宏

一 はじめに

大阪府教育委員会は、一九九九年四月、むこう一〇年間の教育改革の方針として「教育改革プログラム」を策定した。このプログラムでは、「学校教育の再構築」とともに学校・家庭・地域の「総合的な教育力の再構築」が改革の柱とされ、「地域社会の共有財産である学校を核とし、様々な人が共に子どもの教育のために力を出し合う『協働』の関係によって継続的に子どもにかかわるシステムをつくり、地域で展開されている様々な活動の活性化やネットワーク化を進めることなどにより、地域社会の中で子どもを育てる教育コミュニティの形成を図る（教育改革プログラム）」ことが課題とされた。そして、

次年度には、中学校区を基盤とする「教育コミュニティ」づくりを支援する「総合的教育力活性化事業」が始まった。

ここで紹介する岬町は、「教育コミュニティ」づくりが急速に進展しつつある地域の一つである。以下、事業が始まった二〇〇〇年度から昨年度にかけての取り組みを簡単に紹介したい。

二 地域教育協議会の発足

岬町は大阪府の最南部に位置する人口二万弱の町である。南部は和泉山脈で和歌山と県境を接し、府内には珍しく自然海岸も残る。豊かな自然環境に恵まれた町である。全体としては少子高齢化と人口減が進んでいるが、

宅地開発にともなう新しい住民が増えている地域もある。町内には、中学校が二校、小学校が三校、公立幼稚園が一園、公立保育園が四園、私立幼稚園が二園ある。これらの学校園の教職員、保護者、「教育ボランティア」や地域組織、そして町教委が、「教育コミュニティ」づくりのオールキャストである。

府教委は、「教育コミュニティ」づくりを推進する組織「地域教育協議会」の設置を呼びかけている。府下全ての中学校区で協議会が発足したのは二〇〇二年度だが、岬の協議会が発足したのは、それより早い二〇〇〇年秋のことである。

岬町での「教育コミュニティ」づくりには長い前史がある。町内には被差別部落があり、小中学校は地域に根ざした人権・部落問題学習と集団づくりに取り組んできた。また、義務教育修了まで子どもの育ちと学力・進路を保障しようという考えのもと、学校と地域・家庭や学校園の連携がおこなわれてきた。一九九五年度から九九年度にかけては、子どもたちの学力向上をはかる府教委の「ふれ愛教育推進事業」も行われていた。岬町で地域教育協議会がいち早く発足したのは、このような同和教育の積み上げがあったからである。

もつとも、従来の取り組みに問題がなかったわけでは

ない。「ふれ愛教育推進事業」が行われていた頃、その推進組織は学校関係者を中心とする部会と保護者を中心とする部会に分かれ、前者は授業づくり、後者は家庭教育の充実に関する活動をしていた。教育連携のための恒常的組織ができたことは一歩前進ではあった。だが、この組織形態では、保護者と教職員が知恵と力を出し合って共通の課題に取り組んだり、保護者以外の地域住民が活動に参加することは難しかったという。

以上のような経緯をふまえて、新しい地域教育協議会には、活動内容に応じた委員会がおかれることになった。以下、いくつかの委員会の活動を紹介したい。

三 各委員会の活動

1 教育ボランティアの活性化

「人材バンク活用委員会」は、府教委が創設した「大阪府学校支援人材バンク」制度にならない、岬町の人材バンクをつくることを目的として設置された。学校教育を応援しようという思いをもつ地域住民は多く、人材バンク登録者はかなりの数にのぼった。だが、当初、登録者の活動の機会は乏しく、登録者の間には不満もあったと

いう。そこで、委員会は、二年目に、学校を拠点にした「教育ボランティア」活動を活性化する方針を打ち出した。これにともない、委員会の名称は「すこやかボランティア委員会」に改められた。

委員会は、学校園の取り組みの紹介などの広報活動を重視し、取り組みに応じて、登録者以外にも幅広くボランティアを募るようにした。こうして、各校の総合学習および中学校の選択授業への参加や、子どもと大人が協力して行う学校美化

写真1



「花いっぱい運動」が活発になっていった。二〇〇二年度からは、地域住民が講師を務める体験教室「すこやか教室」が土曜日に行われるようになった（写真1）。「すこやか教室」は、子どもの地域活動の「受け皿」というよりも、保護者や地域住民が子どもとともに参加し楽しむ活動として

位置づいている。

人材バンク登録者は、特技や専門的な知識があると自認する限られた層の人々である。また、人材の活用は学校の判断によるため、既存の教育活動にない新しい活動は生まれにくく、人々の参加意識も育ちにくい。これらの問題は、委員会の活動の重点を「教育ボランティア」へと移すことによって解決されていった。現在は、ある程度継続的に活動する「教育ボランティア」登録者ももちろん、できる範囲で様々な活動に自発的に参加する人も増えている。参加者の裾野が広がり参加の「ハードル」が低くなったせいで、当初の目的だった学校教育の活性化も軌道に乗ってきたようである。

2 地域組織の新しいつながり

地域には、民生児童委員、青少年指導員、防犯委員会、体育協会など、青少年の健全育成や子どもの安全に関わる活動をしている人や組織がいくつもあつた。だが、これらの組織や個人の多くは、情報交換や連携のないままに活動し、学校園やPTAとの連携もあまりおこなっていない。

岬の地域教育協議会も、発足当初は、教職員と保護者が中心の組織だった。様々な地域組織が「協力団体」と

写真2



して活動に関わるようになったのは、最近のことである。「児童生徒健全育成委員会」では、発足三年目から、青少年指導員協議会、PTA、ボーイスカウト、教育ボランティアなどの協力のもと、町内でデイキャンプ「夏休みファミリー教室」を行っている（写真2）。参加者によると、当初の予想よりボランティアが多く、子どもと一緒に活動をしてみたいという気持ちをもっている大人が多いことが発見できたという。

バラバラに動いていた組織や個人が一つの活動に協力して取り組む。そのことによって、活動そのものが充実するとともに、準備、取り組み当日、振り返りを通じて組織を越えた大人たちのつながりがつくり出されていく。デイキャンプは、そうした意義をもつ活動として考えることができるだろう。

同じような意義をも

つ活動として、もうひとつ、「子ども一〇番の家」運動を紹介したい。昨秋、私は、子どもの安全確保についてのグループワークを見せていただいた。当日は、中学の教員が全体司会をつとめ、小学校区ごとに、教職員、保護者、防犯委員会、民生児童委員、青少年指導員、子ども会の関係者などが、子どもの遊び場やたまり場、犯罪がおきかけた場所、道路や川などの危険箇所の情報を出し合った。ついで、こうして集まった一つひとつの情報が地図上にしるされていった。最後に参加者は、地図を見ながら今後の取り組みについて話し合った。「子どもの安全」という共通の目的を実現するために、参加者の間で情報が交換・共有され、話し合いが行われる過程は、まさに協働（コラボレーション）と呼ぶに足るものだった。

3 子育てを支えるネットワークづくり

家庭教育支援は社会教育の重要な柱となっている。府内でも「子育て支援」を課題とする地域教育協議会は多い。だが、取り組みは一回限りの講演や講座が中心で、保護者のニーズや生活実感にそぐわないものになっている場合も少なくない。

岬の「子育て支援委員会」の活動も、初年度は活発と

はいえなかった。講師を招いて講演会をしたり、子育てについて座談会を催したものの、保護者よりも教職員の参加が多いこともしばしばだった。委員会の活動が転機を迎えたのは、二年目のことである。保健センターが主催した「マタニティー・クラス 先輩ママをかこんで」に参加したある保護者は「育児書にのっていることより先輩の話が役に立つ」と述べたという。この場に参加していた委員会のメンバーは、この意見をヒントに、保護者が子育ての経験を出し合い、交流する場をつくらうと動き出した。そうして集まった実体験をもとにつくられたのが、子育て劇「命・食・心」である（写真3）。

写真3



劇で観客に伝えられるメッセージは、子育ての「あるべき姿」ではない。「失敗談」も含めた保護者一人ひとりの経験である。だから、観客は劇の内容に共感し、ごく自然に自分の子育てを振り返ることができると。こういうことは、講座や講演会といった従来型の取り組みのな

かでは、なかなか起きるものではない。

劇の成果は、それがつくられていく過程にもある。それは、異世代の保護者・地域住民・教職員のつながりができていくことである。最初の「命・食・心」は乳幼児期の子育てが主題だったが、その後、小学生編や思春期編もつくられた。このことは、劇づくりを通して、子育ての知恵が世代を越えて受け継がれていることを意味する。また、劇中には、子どもの気になる様子について教職員と保護者が話し合う場面がある。これは、常日頃から小中学校や幼稚園・保育所が保護者とともに子どもの育ちを考えようとしていることの表れである。私は何回かこの劇を観たことがあるが、観劇中、脚本づくりや練習の合間に人々が話し合いを重ねている様子が目に浮かぶようだった。

四 おわりに

岬では「教育ボランティア」という新しい仕掛けによって、地域活動や学校支援への人々の参加意識が高まった。地域の組織も活動の場や機会を保護者や教職員と共有するようになってきた。子育てを支えあう大人たちのネットワークも芽生えている。

図 1

すこやかネットワーク
〈岬町地域教育協議会〉

1 〈目的〉

子どもたちの豊かな人間関係づくりと「生きる力」を育むために、学校園所での教育活動を中心とした教育コミュニティづくりをめざす。

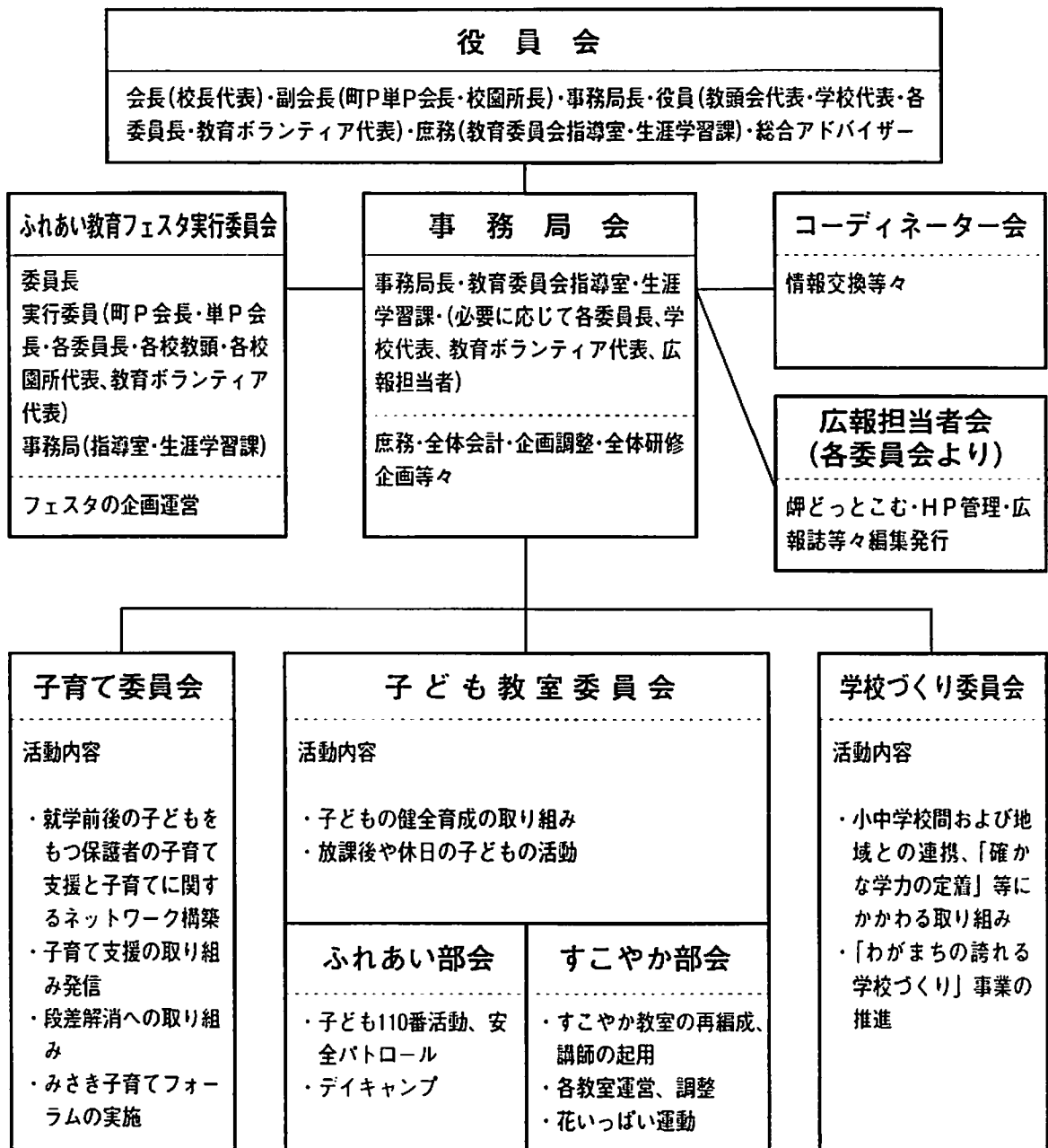
2 〈活動テーマ〉

「育てよう！ うちの子 よその子 岬の子」

～地域教育コミュニティの活性化をめざして～

3 〈組織〉

岬町地域教育協議会は、岬中学校区の各校園所教職員及び保護者、教育ボランティア、地域住民、教育委員会事務局（指導室・生涯学習課）をもって組織する。



注：写真・図はいずれも岬町地域教育協議会提供

岬の地域教育協議会は、具体的な活動を通じて人や組織のつながりをつくってきた。このつながりとそこで生まれる信頼関係や参加意識は、新しい「教育の縁」と呼ぶべきものである。岬の地域教育協議会が取り組んできたのは、このような縁に満ちた「教育を通じた／教育のための」コミュニティづくりだったといえるだろう。

今年度、岬の地域教育協議会は大きく模様替えをした(図1)。「子育て支援委員会」は「子育て委員会」に改称された。教職員と保護者の関係が「支援する・される」という関係から、「ともに」子育てをしようという関係に変わってきたからである。「授業づくり委員会」は、府教委の「わがまちの誇れる学校づくり事業」の指定をうけて、「学校づくり委員会」に改編された。「児童健全育成委員会」と「すこやかボランティア委員会」は、文科省の「地域子ども教室推進事業」を活用するために、「子ども教室委員会」に統合された。「広報委員会」は各委員会の広報担当者会に再編された。岬の地域教育協議会では、活動内容を見直しながら柔軟な組織運営が行われている。これが可能なのは、協議会事務局のメンバーがきめ細かに各組織の連絡調整をおこなっているからである。

私が岬町を訪れるようになって四年がたつ。この間、

地域住民の教育参加や学校と地域の関係のあり方を考える機会を沢山いただいた。岬の皆さんに、改めてお礼申し上げたい。